

ひ　だ　り　う　で

左腕のあざ

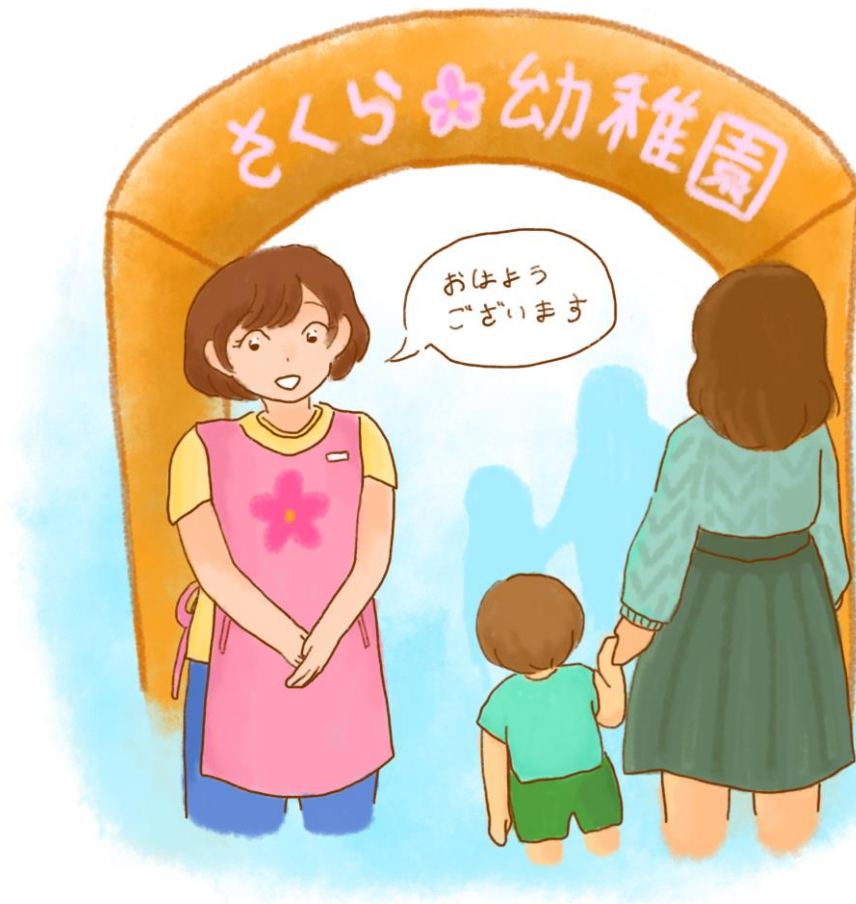


このお話^{はなし}のイラストは、ニュージーランドのウエリントンに住む Trees Neal さん^すが描^かいてくれました。お話^{はなし}を書^かくのを手伝^{てつだ}ってくれたのは、西尾佐知子^{にしおさちこ}さんです。そして、田畑^{たばた}サンドーム^{みつえ}光恵^{はなし}がお話^かを書きました。

わたし す どう く み こ さい こ とし はるだいがく そつぎょう よう ち えん せんせい
私は須藤久美子、22歳。今年の春大学を卒業して、幼稚園の先生
こども とき よう ち えん せんせい ゆめ
になった。子供の時からずっと幼稚園の先生になりたかった。その夢が
やっとかなった。

きょう がつついたち し ごと はじ か げつ た さいきん し ごと な
今日は6月1日。仕事を始めて2ヶ月経った。最近ようやく仕事に慣
れてきた。

あさ よう ち えん もん ところ かあ こども あいさつ く み こ
朝、幼稚園の門の所でお母さんたちや子供たちに挨拶する久美子。
きょう なつふく こども が こども はんそで せいふく
今日から夏服に衣替えなので、子供たちは半袖の制服でやってくる。



く み こ
久美子：「おはようございます。」

かあ せんせい
お母さん1：「あ、くみこ先生、おはようございます。」

く み こ
久美子：「おはようございます。」

かあ せんせい
お母さん2：「くみこ先生、おはようございます。」

く み こ けい こ きょう ながそで
久美子：「おはようございます。あれ、恵子ちゃん、今日も長袖です
か。」

けい こ はは く み こ せんせい えんちょうせんせい もう あ
恵子の母：「あ、久美子先生。園長先生には申し上げたんですけど、
こ ひ や はだ はんそで き
うちの子は日焼けするとお肌がかゆくなるので、半袖は着られないんで
す。」

く み こ
久美子：「ああ、そうですか。わかりました。」

けい こ けい こ はんそで き
恵子：「おかあさん、恵子も半袖が着たい！」

けい こ はは ひ さま はだ
恵子の母：「だめよ、お日様にあたるとお肌がかゆくなるでしょ。」

く み こ けい こ けい こ あつ せんせい とくべつ
久美子：「恵子ちゃん、もし恵子ちゃんが暑くなったら、先生が特別に
うちわであおいであげるよ。先生、すごい可愛いうちわ、持ってるん
だよ。」

けい こ み
恵子：「ほんと？そのうちわ、見たい！」

く み こ なか はい
久美子：「じゃあ、中に入ろうね。」

けい こ はは て すう ねが
恵子の母：「すみません、お手数をおかけしますが、よろしくお願いし
ます。」

く み こ だいじょう ぶ
久美子：「いいえ、大丈夫ですよ。」

よる じ たく かえ あね ま き はな く み こ く み こ あねふう ぶ
夜、自宅に帰って姉の真樹と話している久美子。久美子は姉夫婦と、
はは いっしょ す
母と一緒に住んでいる。

く み こ たいよう
久美子：「姉さん、太陽アレルギーっていうのもあるのね。」

ま き く み こ あね たいよう
真樹（久美子の姉）：「太陽アレルギー？」

く み こ きょう ころも が けい こ
久美子：「うん、今日から衣替えでしょ。でも、恵子ちゃんっていう
こ ながそで よう ち えん き かあ けい こ ひ や
子は、長袖で幼稚園に来たのよ。で、お母さんが、『恵子は、日焼けす
はだ い
るとお肌がかゆくなるんです。』って言ってた。それって、アレルギー
だよね。」

ま き たいよう たい
真樹：「へえー、太陽アレルギー。いろんなアレルギーがあるのね。大
へん けい こ かあ
変ね、恵子ちゃんのお母さん。」

く み こ けん
久美子：「そうなのよ。でも、健はアレルギーがなくてよかったね
え。」

ま き けん かんべき あか
真樹：「ほんと。ラッキーね。健は完璧な赤ちゃんよ！」



ねえ げん き く み こ おも
『姉さん、だいぶ元気になってきたな。よかった。』と久美子は思っ
た。実は、久美子の姉の真樹は4年前に子供を出産したのだが、死産
だったのだ。妊娠中に何も異常がなかったので、思いがけない不幸
に、家族皆がショックを受けた。真樹はしばらくは、ショックと悲し
みに何も食べられなくなっていまい、ずっと元気がなかった。それで
も、真樹の夫の洋介は真樹のことを一生懸命支え続けた。そのおかげ
で、少しずつ真樹の気持ちも明るくなっていった。去年やっと2度目の
妊娠をして、半年前に男の子を出産した。今度は無事にとても元気な
男の子が生まれた。洋介と真樹はその子に健と名づけた。文字通り、

健康^{けんこう}に育^{そだ}ってほしいからだ^{けん}った。『健^{けん}がスクスク育^{そだ}っているから、姉^{ねえ}さんもどん^{げん}どん元^き気^きになっ^くてい^みく^こんだな。』と久^く美^み子^こは真^ま樹^きと健^{けん}を見^みなが^しら幸^{しあわ}せ^きな気^も持^もちにな^もった。

季節^{きせつ}は7^{がつ}月^{すえ}の末^{あつ}。だん^{よう}だん暑^ちくな^{えん}って^{みずあそ}くる。幼^{はじ}稚^み園^はでは、水^{みず}遊^{あそ}び^はが^{はじ}始^{はじ}ま^{はじ}った。子^こ供^{ども}た^{みずあそ}ち^{だい}は^す水^{けい}遊^こび^{みずあそ}が^ひ大^ひ好^ひき^ひだ。で^ひも、恵^{けい}子^こは^{みずあそ}水^{みずあそ}遊^{あそ}び^はの^ひ日^ひは^ひい^ひつ^ひも^ひお^ひ休^{やす}み^{やす}を^{やす}し^{やす}て^{やす}い^{やす}る。あ^{あさ}る^{あさ}朝^{あさ}、久^く美^み子^こは^{けい}恵^{けい}子^この^{はは}母^{はは}と^{はな}話^{はな}を^{はな}す^{はな}る^{はな}チ^{はな}ン^{はな}ス^{はな}が^{はな}あ^{はな}っ^{はな}た。

久^く美^み子^こ：「恵^{けい}子^こち^{みずあそ}ゃ^ひんは^{やす}水^{やす}遊^{やす}び^{やす}の^{やす}日^{やす}は^{やす}い^{やす}つ^{やす}も^{やす}お^{やす}休^{やす}み^{やす}な^{やす}ん^{やす}で^{やす}す^{やす}ね。そ^{やす}れ^{やす}は^{やす}、や^ひっ^ひぱ^ひり^ひお^ひ日^ひ様^{さま}に^ひあ^ひた^ひる^ひか^ひら^ひで^ひす^ひか^ひ。」

恵^{けい}子^この^{はは}母^{はは}：「そ^ひう^ひな^ひん^ひで^ひす。お^ひ日^ひ様^{さま}に^ひあ^ひた^ひると、ほ^ひん^ひと^ひう^ひに^ひか^ひゆ^ひが^ひる^ひの^ひで、^{もう}申^{わけ}し^{わけ}な^{わけ}い^{わけ}ん^{わけ}で^{やす}す^{やす}が、お^{やす}休^{やす}み^{やす}さ^{やす}せ^{やす}て^{やす}頂^{いただ}い^{いただ}て^{いただ}お^{いただ}り^{いただ}ま^{いただ}す。」

久^く美^み子^こ：「そ^{ざん}う^{ねん}で^{ねん}す^{ねん}か、残^{ざん}念^{ねん}で^{ねん}す^{ねん}ね。」

恵^{けい}子^この^{はは}母^{はは}：「え^ええ。。。」

水^{みず}遊^{あそ}び^{あそ}は^ふ普^{つう}通^{すい}は^{よう}水^{すい}曜^{よう}日^びな^{しゅう}の^{よう}だ^ちが、あ^ぎる^ぎ週^じ、幼^つ稚^{ごう}園^じでは^つ行^つ事^{ごう}の^{ごう}都^{ごう}合^{ごう}で^{ごう}水^{みず}遊^{あそ}び^{あそ}を^か火^{よう}曜^び日^びに^しした。ち^しゃ^しん^しと^しお^し知^しら^しせ^しを^しし^して^しい^した^しの^しだ^しが、恵^{けい}子^この^{はは}母^{はは}

はそれを忘れていたらしい。恵子^{けい こ}はいつもどおり幼稚園^{よう ち えん き}に来ていた。さて、水遊び^{みずあそ}の時間^{じ かん}になって、

久美子^{く み こ}：「園長先生^{えんちようせんせい}、どうでしょうか。恵子ちゃん^{けい こ}は水遊び^{みずあそ}ができません^{なか あそ}んですが。中で遊ばせますか。」

園長先生^{えんちようせんせい}：「そうねえ、困ったわねえ。でも、お日様^{ひ さま}にあたらないければいいんじゃない？」

久美子^{く み こ}：「そうですね。」

園長先生^{えんちようせんせい}：「じゃあ、服^{ふく}を着^きせたまま、日陰^{ひ かげ}で水遊び^{みずあそ}をさせてあげましょう。」

久美子^{く み こ}：「はい、わかりました。恵子ちゃん^{けい こ}も喜^{よろこ}ぶ^{おも}と思います。今^{いま}まですずっと水遊び^{みずあそ}をしたがっていたので。」

もちろん、初めての水遊び^{みずあそ}で恵子^{けい こ}は大満足^{だいまんぞく}だった。あんまりはしゃぎすぎて、着^きていた服^{ふく}が泥だらけ^{どろ}になった。泥だらけ^{どろ}の服^{ふく}、泥だらけ^{どろ}の手^てと足^{あし}で、恵子^{けい こ}は久美子^{く み こ}のところにや^きって来た。

恵子^{けい こ}：「先生^{せんせい}、こんなによごしちゃった！」

く み こ けい こ だろ
久美子：「ああ、ああ、恵子ちゃん、泥んこじゃない。」

けい こ
恵子：「うん。。。」

く み こ だいじょう ぶ ふく き が
久美子：「大丈夫。きれいな服があるから、それに着替えましよう
ね。」

けい こ
恵子：「は〜い。」

ふ たり へ や なか はい く み こ けい こ ふく
二人は部屋の中へ入った。久美子は恵子の服をやさしくぬがせた。

たいよう そと あそ けい こ
太陽アレルギーのせいであまり外で遊ばせてもらえないのだろう、恵子
うで ま しろ ひだり そで けい こ うで ひ ば だ
の腕は真っ白だった。左の袖から恵子の腕をやさしく引っ張って出し
とき く み こ おも
た時、久美子は「あれ？」と思った。

けい こ ひだりうで うえ ほう ちい く み こ
恵子の左腕の上の方に、小さなあざがあった。久美子はそのあざの
かたち き かめ かたち
形が気になったのだ。『亀みみたいな形してる、このあざ。。。』

く み こ む い し き けい こ き
久美子は無意識のうちに、恵子に聞いていた。

く み こ けい こ うで も よう
久美子：「わー、恵子ちゃんの腕にはかわいい模様があるね。」

けい こ も よう
恵子：「模様？」

く み こ うえ ほう かめ
久美子：「うん、ほら、ここ。上の方。まるで亀さんみたいだよ。」

けい こ い も よう
恵子：「ああ、それはね、あざって言うのよ。模様じゃないよ。」

く み こ
久美子：「そうか、あざって言うのか。恵子ちゃんのお父さんやお母さんもこんなあざがあるの？」

けい こ
恵子：「ううん、恵子だけだよ。」

く み こ
久美子：「そっか。恵子ちゃんだけか。すごいな。」

けい こ
恵子：「えへへ。すごい、恵子？」



『なんで、^{ひだりうで} 左腕^{うえ}の上^{ほう}の方に^{かめ} 亀のあざがあるのよ？これって偶然？』

^{く み こ} 久美子は、^{よ かん} いや～な予感がした。^{あね ま き ひだりうで} というのも、姉の真樹の左腕^{うえ}の上^{ほう}の方に^{けいこ} 恵子のあざとそっくりな亀^{かめ}のあざがあるのだ。

^{いえ かえ} 家に帰って、^{く み こ ま き はな} 久美子は真樹に話しかけた。

^{く み こ} 久美子：「おねえちゃん、おねえちゃんって、^{ひだり うで} 左の腕^{うで}にあざがなかった？」

^{ま き なに きゅう} 真樹：「何、急に？あるわよ。^{へん かたち} 変な形^{かめ}のやつ。亀^{かたち}みたいな形^{かたち}してるの。だから、『^{わたし} 私^{なが い}って長生き^{な が い}なのかな』とか勝手に^{かっ て おも}思ってるんだけど。」

^{く み こ} 久美子：「しょーむないこと^{かんが} 考えるんだね、おねえちゃんって。」

^{ま き} 真樹：「いい方に^{ほう} 考えたら^{かんが} 楽しいじゃない。でも、何？、^{なに} 急に^{きゅう} 私^{わたし}のあざ^きのこと聞いたりして。」

^{く み こ} 久美子：「いやいや、別に。^{べつ} 今日幼稚園^{きょう よう ち えん}で水遊び^{みずあそ}してたら、^{ちい} 小さなあざがある子供^{こ ども}がいてね。それで、^{きゅう} 急に^{ねえ} お姉ちゃん^{お も}のあざ^だのこと思い出して。」

ま き けん どう
真樹：「あ、そう。健もね、同じところにそっくりのあざがあるのよ。

しょう に か せんせい い けっこう い でん
小児科の先生が言ってたんだけど、あざとかほくろって、結構遺伝するんだって。」

く み こ
久美子：「ふ～ん、そうなんだ。」

く み こ なに げ ところ しんぞう
久美子は何気ないふりをした。でも、心はドキドキしていた。心臓
いま と だ
が今にもガバーっと飛び出しそうなくらいドキドキしていた。というの
けい こ ひだりうで あね ま き かめ ぐうぜん
も、恵子の左腕に姉の真樹とそっくりな亀のあざがあることは偶然じ
き はじ
やないような気がし始めたからだ。

じつ はじ けい こ あ とき く み こ けい こ あね ま き おっと ようすけ
実は、初めて恵子に会った時、久美子は恵子が姉の真樹の夫の洋介
おも ようすけ かお に ほん
にそっくりだと思ったのだ。洋介の顔はとてもはっきりしている。日本
じんばな がいこくじん いま ようすけ ま ちが
人離れしていて、外国人のようだった。今でも洋介はよくハーフと間違
われることがある。

けい こ ははおや ちちおや い しつれい かお だ
恵子の母親と父親は、こう言うと失礼だが、はっきりとした顔立ちで
ふ たり め ちい はな けい
はない。二人とも目が小さくて、鼻もきりっとしていない。なのに、恵
こ がいこくじん かお とき けい こ
子はまるで外国人のようにはっきりとした顔をしている。ある時、恵子
ははおや ほか かあ い
の母親が他のお母さんたちにこう言っていた。

けい こ はは こ わたし しゅじん に かお だ
恵子の母：「うちの子は、私にも主人にも似ず、顔立ちがはっきりし
ていて、まるでフランス人形にんぎょうのようだってよく言われるんですよ。こ
れって、『トンビが鷹たかを産うんだ』っていうことかしら。」

ほか かあ けい こ き れい かお いま
他のお母さんたち：「ほんと、恵子ちゃんって綺麗な顔してますよ
ね。」「ほんと、ほんと。」「うらやましいわあ。」「ねえ。」

く み こ かい わ ちゅう い はら いま
久美子はその会話にあまり注意を払わなかった。でも、今となって
は、すごく気にかかる。『ほんとだ、恵子ちゃんって、お父さんにもお
かあ ぜんぜん に なん
母さんにも全然似てない。何でだろう。』

く み こ こと かんが はじ けい こ
そして、久美子はこんな事を考え始めた。『恵子ちゃんは、もしか
ねえ ようすけ こ ども
したらお姉ちゃんと洋介さんの子供じゃないのか?!』

はず あね ま き さいしょ こ し ざん
でも、そんな筈はない。姉の真樹の最初の子は死産だった。ちゃんと
こ そうしき
その子のお葬式もした。でも、でも、でも。。

く み こ とっぴょう し かんが む し
久美子はこの突拍子もない考えを無視することができなかった。そ
にちよう び しょう た でん わ しょう た だいがく なか ま
して、日曜日に翔太に電話をした。翔太は大学のクラブの仲間だ。と
わかもの あたま おも
てもユニークな若者で、頭がいい。いつもみんなが「え〜！」と思う

ことを言^いったり、し^くたりする。久美子^こは、『翔太^{しょうた}なら私^{わたし}の馬鹿^{ばか}な話^{はなし}を
ちゃんと聞^きいてくれる』と思^{おも}った。

久美子^{くみこ}：「翔太^{しょうた}、久^{ひさ}しぶり。元^{げん}気にしてた？」

翔太^{しょうた}：「おう。まあな。で、幼^{よう}稚^ち園^{えん}の方^{ほう}はどうなん？」

久美子^{くみこ}：「どうにかや^やってるよ。」

翔太^{しょうた}：「そっか。俺^{おれ}も、どうにか大^{だい}学^{がく}院^{いん}の勉^{べん}強^{きやう}、生^いき残^{のこ}ってる。で
も、お前^{まえ}から電^{でん}話^わをかけ^めてくるって、珍^{めづ}しいな。どうしたん？」

久美子^{くみこ}：「こんなこと、他^たのま^まともな人^{ひと}には言^いえないから。。。」

翔太^{しょうた}：「っていうのは、俺^{おれ}がま^まともじゃ^{じゃ}ないってこと？」

久美子^{くみこ}：「いやいや、あん^いたが、ユニークだ^いと^いうことよ。」

翔太^{しょうた}：「ど^なっちでも^にいいけど、で、何^{なに}？」

久美子^{くみこ}は翔太^{しょうた}に自^じ分^{ぶん}が考^{かん}え^がて^ないることを話^はした。

『幼^{よう}稚^ち園^{えん}に^{けい}いる恵^{おんな}子^こちゃん^うとい^あう女^ねの^ま子^きの腕^{うで}に、姉^{あね}の真^ま樹^きにそっ
くりな亀^{かめ}の形^{かたち}のあ^{けい}ざ^こがある。その恵^{りやうしん}子^{ぜん}ちゃん^{ぜん}は。両^{りやうしん}親^{ぜん}には全^{ぜん}然^{ぜん}似^に
てお^ならず、何^な故^ぜかし^あら、姉^{あね}の真^ま樹^きの夫^{おと}の洋^{よう}介^{すけ}によ^にく似^にて^にいる。だ

から、もしかしたら、恵子は姉と洋介の子供ではないか。でも、
姉の子供は死産でちゃんとお葬式もした。じゃあ、これはどうい
うことか？

久美子：「変な話だと思ったでしょ？ 私の頭はどうかしてる？」

翔太：「いや。世の中、色んなことがあるからな。真相は、調べてみ
ないとわからないぜ。」

久美子：「じゃ、私の考えてることが、もしかしたら本当かもしれない
って思ってくれるの。」

翔太：「お前の考えてることは確かに突拍子もないことだけど、お前
が直感でそこまで強く感じるからには、無視できないところがある。
女の勘って怖いし。」

久美子：「直感と勘って違うんじゃない？」

翔太：「それはどうでもいいことだ。とにかく調べて真相がわかった
らスッキリするということは確かだ。それに、俺も真相を調べたい。」

久美子：「さすが、変わり者の翔太。他の人だったら、話を最後まで
聞いてもくれないと思う。」

しょう た
翔太：「ほめられてるのか、けなされてるのか、よくわからんが、
おもしろ しら
面白そうだ、調べてみようぜ。」

く み こ わたし かんが ほんとう
久美子：「でも、もし私の考えが本当だったら。。。」

しょう た おもしろ なん い
翔太：「『面白そうだ』何て言ってもらえなくなるな。」

く み こ
久美子：「うん。」

しょう た とき せきにん と かく ご も
翔太：「その時は責任取る覚悟を持てよ。マジに。」

く み こ
久美子：「わかった。」

く み こ しょう た と あ しんそう こわ こうぶん かん
久美子と翔太は、これから解き明かされる真相に怖さと興奮を感じ
ひ く み こ しょう た しんそうきゅうめい はじ
た。その日から久美子と翔太の真相究明が始まった。

さいしょ く み こ よう ち えん けい こ けいたい しゃ
最初に久美子が幼稚園にある恵子のプロフィールをこっそり携帯で写
しん と しょう た おこな
真に撮った。そして、翔太のアパートに行った。

く み こ はんざい
久美子：「これって、犯罪よね。」

しょう た いま こ じんじょうほう ほ ご ぜったい
翔太：「ああ、今は個人情報保護にうるさいからな。バレたら絶対
くび まえ
首だな、お前。」

く み こ やく たんじょう び か
久美子：「でもこれ、あんまり役にたたないわ。誕生日は書いてある
けど、どこの病院で生まれたのか書いてないもん。」

しょう た な に い たんじょう び だい じ じょうほう
翔太：「何言ってるんだよ、その誕生日って、大事な情報だろ。それが
お前の姉さんが子供を産んだ日と一緒にいたら、マジやばいじゃない
か。」

く み こ たんじょう び がつ は つ か ちが
久美子：「そうか。そうだよね。で、誕生日は7月20日。違うよ。お
姉ちゃんが子供を産んだのは、7月の18日だもん。」

しょう た まえ あたま つか ふつ か ちが けい こ
翔太：「お前、頭、使えよ。たったの2日違いだぜ。もしその恵子っ
て子の親が、何らかの形でお前の姉さんの赤ちゃんを自分たちの赤
ちゃんとして盗んだんだったら、そのまま正直に7月18日生まれって、
書くかよ。」

く み こ しょう た かんぜん けい こ
久美子：「そっか。そうだよね。でも、翔太、もう完全に恵子ちゃん
がうちのお姉ちゃんの子供だと思ってない？」

しょう た おな おな かたち か かお
翔太：「同じところに同じ形の変ったあざがあって、顔はだんなの
ようすけ とど たんじょう び まえ ねえ こども
洋介さんにそっくりで、届けられた誕生日も、お前のお姉さんが子供
を産んだ日とたったの2日違い。これは、もう100 % 間違いないじゃ
ないか。どう考えても。」

く み こ い
久美子：「そう言われるとそうだけど。」

しょう た い しゃ まえ ねえ こ ども し ざん う だれ こ ども
翔太：「医者がお前のお姉さんの子供と死産で生まれた誰かの子供を
か だれ けい こ ははおや こ か
すり替えたんだ。いや、誰かじゃない。その恵子の母親の子とすり替え
たんだ。」

く み こ
久美子：「そんなこと。。。そんなこと、できるの。」

しょう た ねえ ようすけ たち あ しゅっさん
翔太：「お姉さんのだんなの洋介さん、立会い出産だったのか。」

く み こ し ごと ま あ たち あ しゅっさん
久美子：「それが、仕事で間に合わなくて、立会い出産できなかった
の。」

しょう た だれ か ぞく しゅっさん た あ
翔太：「じゃ、誰か家族が出産に立ち会ったのか？」

く み こ わたし かあ びょういん ぶんべんしつ まえ ま
久美子：「私もお母さんも病院にはいたんだけど、分娩室の前で待つ
てたの。」

しょう た ぶんべんしつ なに お だれ
翔太：「じゃあ、分娩室で何が起こっても誰にもわからないじゃない
か。」

く み こ なに お はんざい お
久美子：「何が起こってもって、まるで犯罪が起こったみたいじゃな
い。」

しょう た はんざい はんざい
翔太：「まるで犯罪じゃなくて、犯罪なんだよ。」

く み こ い しゃ なに い
久美子：「まさか。。。あの医者が何かしたって言うの。じゃあ、あの
い しゃ き ほんとう おし
医者からそれを聞きださなくちゃいけないの？でも、本当のことを教え
てくれるかしら？」

しょう た かんたん おし あたま つか
翔太：「そんな簡単に教えてくれるわけないだろ。頭を使うんだ
よ。」

く み こ あたま つか びょういん
久美子：「頭を使うって、どうしたらいいんだろう？病院のカルテを
ぬす かん ご し き
盗む？看護師さんに聞く？」

しょう た さいしょ かんてい
翔太：「まず最初にやるのは、DNA鑑定さ。」

く み こ
久美子：「え？」

しょう た けい こ ほんとう おや こ かんてい しら
翔太：「恵子ちゃんとお姉さんが本当の親子か DNA鑑定で調べるん
だ」。

ふ たり かんてい ほうほう しら はじ
そして二人は DNA鑑定の方法について調べ始めた。

く み こ なん かんてい
久美子：「すごい、Amazon って何でもあるのね。DNA鑑定キット
セットだって。こんなの買う人いるのかな。」

しょう た かみ け かんてい
翔太：「まじめにやれよ。ネットによると髪の毛による DNA鑑定は、
むずか たか いま おれ
難しいし高そうだ。でも、今の俺たちにはあまりチョイスはないな。
かみ け いちばん おれ つよ み かた
髪の毛が一番ゲットしやすいからな。ただ、俺たちには強い味方がい
る。」

く み こ だれ
久美子：「誰、それ？」

しょう た た なか
翔太：「田中さ。」

く み こ た なか くん か そうけん しゅうしよく なに
久美子：「そっか、田中君、科捜研に就職したんだよね。何かあんまり
いま やく こ とき やく
り今まで役にたたない子だったけど、こんな時に役にたつなんてねえ。
ははは。」

しょう た き けい こ こ かみ け かみ
翔太：「そうと決まったら、その恵子って子の髪の毛と、姉さんの髪
け
の毛をゲットしろ。」

く み こ りょうかい
久美子：「了解！」

く み こ しょう た た なか ところ も い か そうけん し ごと
久美子と翔太はゲットした田中の所に持って行った。科捜研で仕事
た なか ほんとう こ じんてき けん さ
をしている田中は、「本当は個人的な検査はできないんだけど」とぶつ
ぶつ言いながらも、しかた かんてい けっ か
仕方なく DNA 鑑定をしてくれた。そしてその結果
は。。。



けい こ く み こ あね おや こ かくりつ パーセント
恵子ちゃんと久美子の姉が親子である確率は：99.5 % だった！

けっ か まえ く み こ しょう た かんが こ
その結果を前にして、久美子と翔太は考え込んだ。

く み こ
久美子：「どうする？これから。」

しょう た まえ ねえ こ ども と もど けん り
翔太：「お前の姉さんには子供を取り戻す権利があるよ。もちろん。

い しゃ まえ あか けい こ い こ
でも、なんで、医者がお前の姉さんの赤ちゃん、その恵子っていう子
ははおや あか か しら ねえ
の母親の赤ちゃんをすり替えたのかを調べようぜ。そして、お姉さん
に、詳しいことを説明してあげた方がいいよ。」

く み こ あか
久美子：「そうね。いきなり『おねえちゃん、おねえちゃんの赤ちゃん、
し じつ い いまわたし よう ち えん
死んでなかったのよ。実は生きてて今私の幼稚園にいるの。DNA
かんてい けっ か い なに
鑑定の結果も 99.5%だったわよ。』って言っても、何がなんだかわか
らないよね。」

しょう た むずか い しゃ
翔太：「そうだよ。でも、ここからが難しいところだな。なぜ医者が
しら かんたん
そんなことしたのか、調べるのは簡単じゃないぜ。」

だい に しんそうきゅうめい たいへん く み こ しょう た か そうけん
この第二の真相究明は大変だった。でも、久美子と翔太は、科捜研
はたら ゆうじん た なか たよ すけ と しょうかい
で働いている友人の田中から、頼りになる助っ人を紹介してもらっ

た。刑事を退職した長井五郎だ。長井五郎は、刑事の経験を使って見
ごと しんそう たね あ
事に真相を種明かししてくれた。

く み こ あね ま き かよ よし だ さん ふ じん か けいざいてき
久美子の姉の真樹が通っていた吉田産婦人科は、ずっと経済的に
くる は さんすんぜん けい こ
苦しかった。もう破産寸前だったらしい。それが、ちょうど恵子
う ころ けいえい よ なが い ご ろう
が産まれた頃から経営が良くなった。長井五郎はそれがおかしい
おも なが い ご ろう めんみつ しら けい こ ちち
と思った。そして、長井五郎が綿密に調べてみると、恵子の父か
らく えん きん よし だ さん ふ じん か なが
ら3億円という金が吉田産婦人科に流れていたことがわかったの
なが い ご ろう いろいろ しょう こ み しょう こ も
だ。長井五郎は色々な証拠を見つけてくれた。その証拠を持っ
なが い ご ろう く み こ しょう た よし だ さん ふ じん か いんちょう あ
て、長井五郎と久美子と翔太は、まず吉田産婦人科の院長に会っ
いんちょう けい こ はは う し ざん あか く み こ
た。院長は、恵子の母から生まれた死産の赤ちゃん、久美子の
あね う げん き あか か みと つぎ さんにん
姉の産んだ元気な赤ちゃんをすり替えたことを認めた。次に三人
けい こ りょうしん あ
は、恵子の両親に会った。

けい こ はは こ ども こ ども
恵子の母：「どうしても子供がほしかったんです。ずっと子供ができな
かった。でも、どうしても子供がほしかったんです。久美子先生のお姉
もう わけ おも
さんには申し訳ないことをしたと思っています。」

く み こ もう わけ おも
久美子：「申し訳ないって、それですむと思っているんですか！！それ
で。」



とき けい こ ヘ や はい
その時、恵子が部屋に入ってきた。

けい こ く み こ せんせい おこ
恵子：「久美子先生、どうしたの。ママに怒ってるの？ママ、どうして
泣いてるの？ママ、だいじょうぶ？だいじょうぶ？」

く み こ い じょうなに い
久美子はそれ以上何も言えなかった。

く み こ しょう た なが い ご ろう たいへん はんざい み たいへん
久美子と翔太と長井五郎は、大変な犯罪を見つけてしまった。大変
しんそう きゅうめい しんじつ て いまさんにん
な真相を究明してしまった。でも、真実を手にして今三人はどうして
いいか答えを見つけることができない。

(3648 語 JLEX4000 語のテキストカバー率 94.2%)